

も可能な限り治癒切除がなされれば、良好な予後が期待出来ると考えられた。

4 腹膜原発 c-KIT 陽性腫瘍の 1 例

富田 広・加納 恒久・牧野 春彦
県立坂町病院外科

症例は 75 歳，男性。肺気腫にて当院内科通院中。経過観察目的にて胸部 CT 施行。左横隔膜下に長径 8cm の腫瘍を指摘された。精査の結果胃 gastrointestinal stromal tumor (GIST) の疑いとなり，手術を施行した。術中肉眼所見にて腫瘍は脾門部に存在し，胃後壁と接してはいたが，連続性は無く，胃原発とは考えがたく，腹膜原発腫瘍と考え，腫瘍の切除を行った。脾，脾原発の腫瘍でもなかった。また，他の消化管に異常は認めず，他の消化管からの転移ではなかった。病理組織診にて c-KIT，CD34 陽性であった。GIST 以外で c-KIT が陽性となる腫瘍として，肥満細胞腫，精巣腫瘍，肺小細胞癌，乳癌が報告されている。GIST の腹膜原発の報告は散見されるが，腹膜原発で c-KIT が陽性となる腫瘍は極めてまれである。

5 各病態における血中 Plasminogen activator inhibitor - 1 (PAI-1) 濃度とその意義

中塚 英樹・須田 和敬・松木 淳
長谷川 潤・島影 尚弘・内田 克之
岡本 直孝・田島 健三

長岡赤十字病院外科

【目的】 エンドトキシンや炎症性メディエーターによる血管内皮細胞からの Plasminogen activator inhibitor - 1 (PAI-1) 産生調節機構が DIC, MOF の重要な契機のひとつとして考えられている。われわれは術後あるいは術後合併症発症時に PAI-1 を測定し，DIC や MOF の契機となり得る血管内皮障害を早期に判別できるかどうか検討した。

【方法】 消化器手術をうけた 26 名において，術後あるいは重篤合併症発生時に血中 PAI-1 を計

測した。

【結果】 over all での検討では，同時に計測された WBC, CRP, PLT, FDP, D-dimer に対して有意な相関はみられなかった。経時的にみた症例のうち，高値例 (200ng/ml 以上) では，全例 DIC を発症していた。

【考察】 PAI-1 は血管内皮細胞障害および線溶系調節障害をあらわす鋭敏な検査であり，様々な病態において，DIC, MOF への移行を早期に知る指標となる可能性が示唆された。

6 術前非浸潤性乳管癌 (DCIS) 診断症例に対する乳房温存療法 (BCT) とセンチネルリンパ節生検 (SLNB) の検討

神林智寿子・佐藤 信昭・田中 乙雄
梨本 篤・土屋 嘉昭・藪崎 裕
瀧井 康公・中川 悟・野村 達也
本間 慶一*

県立がんセンター外科
同 病理部*

1998 ~ 2006 年の間に DCIS の術前診断で手術施行した 80 例 (平均年齢 52 歳，観察期間中央値 31M) に対し BCT と SLNB を検討。

【結果】 術後最終病理は，DCIS 70 例，浸潤性乳管癌 (IDC) 10 例であった。IDC のうち 2 例が腋窩リンパ節転移陽性であった。IDC 症例は病変範囲が広い例が多く，このような症例では術前 DCIS の診断でも SLNB が有用と思われた。BCT は 41 例に施行し断端陽性は 10 例 (24.3%) であったが臨床病理学的な因子との有意な関連はなかった。残存乳房内再発は 2 例 (4.9%) であった。症例を選んだ BCT は DCIS でも可能と考える。

7 虫垂内異物の 1 例

小森登志江・内藤 真一・新田 幸壽
飯沼 泰史*

新潟市民病院小児外科
同 救命救急センター*

症例は 11 ヶ月の男児。携帯ストラップの金属